【1面より続く】

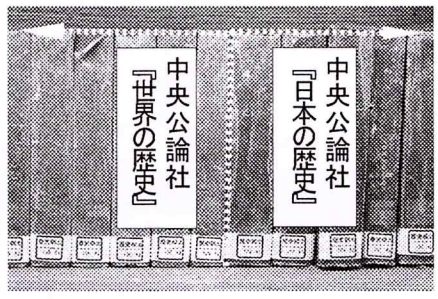
日本史の基礎資料が世界史のコーナーに

多賀城は奈良時代から国史に記録されている稀な地域で、本市は「史都」を標榜しています。例えば、『続日本紀』という奈良時代の正史には、737年に大野東人が多賀城から秋田城に雄物川沿いに道路を開削しようとし、奈良から藤原麻呂が来て多賀城の留守番をしたこと。774年には桃生城が焼かれ、早馬を出す時に出立時刻の記載が必要と漏刻（水時計）の設置を要求し認められたこと、780年に多賀城が焼かれたこと等が記されています。

また平安初期の正史『日本後記』には、802年の阿弓流為と母禮の降伏と処刑などが、『日本三大実録』にはすっかり有名になった貞観の大津波のことなどが記載されています。

これらは「国史大系」というシリーズに収録されていますが、その場所は3階北側西端の「世界史」のコーナー7～8段の手の届かないところにあります（写真左。白い点線部分）。

『国史大系』は世界史コーナーの最上段



日本・世界の通史が隣り合わせ

一般書籍でも同じです。上の写真を見てください。中央公論社の『世界の歴史』と『日本の歴史』が並んで配架されています（ラベルはともに「109チュ」）。どうやらCCCは世界史も日本史も関係なく、装丁で分類している模様です。

現代文学のなかに突然『新日本古典文学大系』・『冷泉家時雨亭叢書』

こうした傾向は文学も同じです。

2階のキャットウオークには現代文学の全集がずらりと並んでいます。ところが突然、岩波書店の『新日本古典文学大系』や『冷泉家時雨亭叢書』が…。『新日本古典文学大系』には『万葉集』『続日本紀』『古今和歌集』『源氏物語』『平家物語』などが収録されています。

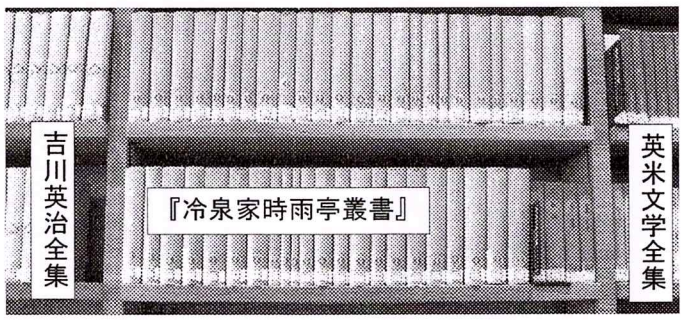
現代文学全集の中に『新日本古典文学大系』…

『冷泉家時雨亭叢書』は歌人として有名な藤原定家の孫を祖とする冷泉家が家宝として守ってきた「文庫」を、近年朝日新聞社が写真版として出版した1冊数万円の高価なもの。ともにどちらかというと研究対象の本です。

2階西端に古典文学コーナーがあるが…

実は、2階の西端に古典文学のコーナーがあり、そこには万葉集や奥の細道関連の本、新潮社の『日本古典集成』等があります。藤原市議が「なぜ現代文学の中に古典があるのか」と質したら「全集はここに集めている」（課長）。

ちなみに『新日本古典文学大系』の左隣は『司馬遼太郎全集』右隣は『高村光太郎全集』『太宰治全集』『竹久夢二全集』等。『時雨亭叢書』に左隣は『吉川英治全集』、右となりは『ヘミングウェイ全集』など英米文学全集になっています。CCC分類は、全集であるならば、現代文学であろうが古典文学であろうが、英米、東洋であろうが関係ないようです。



多賀城市教委、ごちゃ混ぜ配架を是認

藤原市議は教育長に対し「新館は旧館にくらべ非常に解りにくい配架となっている。せめて世界史と日本史、現在文学と古典文学くらいは区別するべきではないか」と尋ねました。しかし教育長は「ご指摘の面はあるかもしれないが、是正すると新たな問題が発生する懸念もある」として、今の配架を是認する態度をとりました。

多賀城歴史歳時記 34

西行、中秋に頼朝と語らう

西行（1118年～1190年）は平安末期の歌人。『山家集』に次の十五夜の歌がある。「数へねど今宵の月のけしきにて秋のなかばを空にしるかな」（今日は何日かと数えてはいないけれど、今宵の月の景色で中秋の名月であることを知ることだ）。西行が頼朝と語り明かしたのも中秋、すなわち文治2年8月15日（現在暦1186年10月6日）のこと。中秋がこの季節にずれ込んだのはこの年、閏7月があったからだ▼鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』同日条に以下のことが記されている。頼朝が鶴岡八幡に詣でると一人の老僧が鳥居の辺を徘徊していた。梶原影季に名を尋ねさせると西行だった。頼朝がお話したいと誘うと西行は承知、御所に招き入れた。頼朝が兵法のことを尋ねると西行は「保延三年八月遁世（出家）の時、秀郷朝臣より以来九代の嫡家相承（＝相伝）の兵法は焼失す。…皆忘却しをわんぬ」。歌道について尋ねると「詩歌は、花月に対して動感するの折節、わづかに三十一字を作るばかりなり。全く奥旨（＝奥義）を知らず」とそっけない▼しかし頼朝が繰り返し訪ねると西行は、弓馬のことについて丁寧に答えた。こうして満月の夜、二人の会話は深夜に及び、西行の退出は翌日の昼となった。頼朝は盛んに引き留めたが西行の意思は固い。頼朝は銀製の猫を西行に与えたが、門外で小さな子どもに与えてしまったとのこと。『吾妻鏡』は西行が鎌倉を通過した理由を次のように記している。「これ重源上人の約諾（＝約束）を請け、東大寺料に沙金（＝砂金）を勧進せんがために奥州に赴く。この便路をもって鶴岡に巡礼すと云々。陸奥守秀衡入道は上大（西行）の一族なり」▼すなわち西行は、東大寺再建をめざす重源上人から、西行と一族の秀衡に砂金の提供をお願いするよう依頼され、平泉に向かう途中鎌倉に立ち寄ったのである。西行と奥州藤原氏は、平将門の乱の際、将門を打ち取ったことで有名な藤原秀郷を共通の祖先とするが、この時代も広く知れ渡っていたらしい。なお秀郷を遡ると魚名、そして鎌足まで行き着くことはいうまでもない▼ところでなぜ東大寺再建が必要だったのか。源平合戦さなかの治承4年12月28日（現在暦1181年1月22日）平清盛の五男重衡が焼き払ったのである。南都（奈良）の寺院や民衆の中に平氏に対する反発が広がり、清盛が治安強化のために派遣した兵が囚われ興福寺南の猿沢池に晒されてしまった。清盛は怒り、重衡を大将軍に任じ4万余騎を与えて南都攻撃を命じた。この日戦闘は終日続き、夜、重衡が般若寺の民家に点火を命じると強風にあおられ1・5キロほど南の東大寺・興福寺がほぼ全焼してしまった。この際の焼死者は三千五百人余に達するという（平家物語）▼2018年に東北歴史博物館で「東大寺展」が開催される。東大寺は諸国分寺の総本山。陸奥国分寺跡は仙台市木下にある。加えて創建時、大仏に涌谷産出の金が使用され、源平合戦での焼失の際、西行は平泉にまで出かけ砂金勧進。これらを念頭に置けば、多賀城での「東大寺展」はより意味があるものに思えてくる。